第４号 令和８年７月１日

３学年通信　まじめな努力 ＝ 楽しい時間

担当：中村順子

「訳せない日本語、『腰』　～ Why ‘Koshi’ Cannot Be Translated～」

突然ですが、うどんは腰があるほうが美味しいですね。

腰―――日本は「腰の文化」と呼ばれます。身体の部位を超えて“人間の在り方”まで腰で語ってしまう国だからです。欧米にはその概念的広がりが存在しないため、完全に一致する訳語が見当たりません。私自身、英語に深くかかわる人生の中で、とても苦労するのが、英語と日本語において**一対一の訳語が存在しない**ことが多々あることです。その一つが「腰」です。

日本語の「腰」は、単なる体の一部ではありません。そこには「踏ん張る」「据える」「引く」「抜かす」など、心の状態や行動の覚悟まで宿っている。日本人は物事の中心や要を“腰”に見立て、身体と精神を地続きのものとして捉えてきました。武道では「腰が入る」ことが技の基本であり、茶道や能でも姿勢の要は腰に置かれる。つまり腰とは、身体の中心であると同時に、精神の重心でもあります。

一方、英語における「腰」という語にあたるものは、*lower back* や *waist* が最も近い訳語ですが、どちらも“物理的な部位”に留まります。欧米文化では、精神や意志の中心は胸（heart）や頭（mind）に置かれ、腰が象徴的役割を担うことはほとんどありません。

そのため「腰が重い」「腰を据える」「腰が引ける」といった日本語の比喩は、英語に訳すと説明的で冗長になり、ニュアンスが抜け落ちてしまいます。これは単なる語彙の不足ではなく、**文化が前提としている“身体観の違い”**が生むギャップです。

欧米語には「腰＝行動の覚悟」という発想が存在しないため、対応する単語が育たなかったのでしょう。言語は文化の鏡であり、文化が必要としない概念は語として定着しません。日本語の腰は、身体の中心であり、精神の中心であり、行動の中心でもあるからこそ一語で多くを語れます。逆に英語では、覚悟は *determination*、姿勢は *posture*、核心は *core* と分解され、腰に集約されない。つまり日本語の腰は、欧米語では複数の語に分散してしまうため、**一対一の訳語が存在しない**のです。

翻訳者は、文化の違いで生まれる“腰の空白”を埋めるために、文脈ごとに最適な言葉を選び続けてきたと思います。腰という言葉は、日本語が身体と心を一体として捉える文化を象徴する存在です。そしてその独自性こそが、日本語の豊かさであり、翻訳の面白さでもあります。そういったこともあり、外国語としての英語は、私自身はどんなに勉強しても簡単な言語と思ったことは全くありません。

３年生の皆さん、腰を据えて自分を見つめ、未知の世界に腰を抜かしてはいけません。状況に応じ腰を低くし、おのおのの進路実現に向けて有意義な日々を送って欲しいものです。来たる夏季休暇を実りあるものにしてください。

☆７月（文月）の行事予定・月訓『努力』

1	水	▼短縮(40 分×6･7 限)・求人票受付開始 ベネッセ総合学力記述（午後）	14	火	◇選考希望就職先リスト登録完了
			15	水	◇保健講話（3･4 限）
2	木	▼　ベネッセ総合学力記述（終日）	16	木	◇実力診断テスト（1～3 限）
3	金	▼　求人票閲覧開始　過年度単位認定試験	17	金	1 学期終業式・全国総体壮行会
4	土	第 2 回保護者会委員会　受験対策講座⑥ 上期第一種電気工事士技能試験	18	土	
			19	日	上期第二種電気工事士技能試験
5	日	全商ビジネス文書実務検定試験 第 1 回実用英語検定（二次）	20	月	海の日（祝日）
			21	火	就職選考会議（9:00）
6	月	朝礼・■短縮 40 分×4 限（正規の 1～4 限） ◎保護者懇談会	22	水	
			23	木	
7	火	■◎　就職関連書類配布 選考希望就職先リスト登録開始	24	金	
8	水	■◎	25	土	
9	木	■◎	26	日	
10	金	■◎　第 1 回日本漢字能力検定（校内）	27	月	就職希望者出校日（9:00）・職場見学開始
11	土	受験対策講座⑦	28	火	
12	日		29	水	
13	月	◇短縮 40 分×4 限(正規の 3-6 限) SNS 講話（3,4 限）	30	木	
			31	金	

☆コラム 「先入観は不公平なのか？」

人は、他人を見るとき、その人の身だしなみ、仕草や態度などから、どのような人間であるのかを判別してしまうものである。また、その人が信用できる人なのか、信用できない人なのかをその人のことをよく知らなかったとしても先入観で判断することが多い。同じ失敗をした 2 人が、同じように注意を受けるとは限らないという例がある。ある人は、失敗に対して厳しく罵倒され、ある人は、そこまで厳しい叱責もないままに許される場合がある。同じ失敗でも、その後の状況に差が出るのは不公平なのではないか。しかし，その差というのは、時計の針を巻き戻してみると、意外と不公平ではないのかもしれない。ある人は、何度も注意指導を受けながらも全く改善されず、これまでの言動により信頼を失っていたのかもしれない。また、ある人は、普段から丁寧な仕事ができ、周囲から信頼される人物でありながら、今回は、たまたま失敗してしまったのかもしれない。人々の日々の言動は、周囲に印象という曖昧ではあるが、確実に何らかの影響を与えている。その人の身だしなみ、生活態度などが周囲の印象を左右し、失敗をしたときに、いい加減な気持ちで仕事に取り組んだ結果によるものなのか、一生懸命に取り組んだが、ちょっとしたミスにより失敗してしまったものなのかを、人は事実を知らないままに先入観によって、その失敗に対する見方を変えるのである。一見不公平にも感じられるが、少し視点を変えれば、失敗という出来事だけに着目するのではなく、それ以前の言動も含めた上での対応の差であれば、これこそが公平なジャッジであるようにも感じる。普段から、周囲に好印象を与え、よい方の先入観を抱いてもらえるような言動を心掛けたいものである。　～ 3rd Grade Teacher Okubo ～